

【コラム】

コミュニティ & ボランティア

坂口 緑 (明治学院大学)

被災地から進学のために上京してきた大学生と話す機会があった。卒業式を控え、東京での新しい暮らしを夢見ていた時、地震と津波の被害を受けた。高台に逃れた人たちも家族や家屋を失い、避難所で身を寄せ合った。彼も一ヶ月遅れになった入学式の直前まで、避難所で働いた。そして2011年5月に単身で上京した。アパートへの引っ越しを済ませ、まず彼が思ったのは、この町に自分の居場所を作ろう、ということだった。被災地では、高齢者以上に、地元のネットワークをもたない一人暮らしの学生こそが弱者だった。情報が届かず、人数もわからなかった。体力も気力もあり情報収集力にも優れた学生が、実は災害時にどうしようもなく孤立してしまう。そのような現実を知り、彼は新しい町に根付くことを四年間の課題に定めたのだ。

友人たちが週末ごとに被災地へ赴くのを横目に見ながら、彼は、土日になると町の小学校に出かけていった。校庭開放の時間をできるだけ子どもと一緒に過ごした。子どもを通して知り合いが増えていった。

2020年に発生した新型コロナウイルス感染症の影響により、私たちの生活は一変しました。改めて東日本大震災時に誰もが感じた人とのつながりの大切さを思い出します。これからの暮らしを考えるきっかけになればとの思いから、2011年に寄稿いただいたコラムを再掲することにしました。ぜひご覧ください。

友人といっしょにイベントを企画した。小学校の先生がアイデアを出してくれた。協力してくれる地元の人も出てきた。「近所で買い物をしていると、挨拶してもらえるようになりました」とうれしそうに話す。「これでいつ災害があっても大丈夫。災害時に孤立したくない。そんな動機で始めた彼の活動は、自分本位なものかもしれない。けれども、被災地で、そして一人暮らしをしている町で彼が重ねているのは、平時も非常時も、個人を越えて役立つ経験である。震災後、私たちの生活には、こんなふうにボランティア活動が根付きつつある。

ボランティアとコミュニティ。どちらも待っているだけでは何も始まらない。けれども、一歩踏み出すことさえできれば、豊かな世界が広がっている。どこかに行こう。誰かに話してみよう。人に任せきりにしてきた世界を、自分たちの手に取り戻すために。

【坂口緑氏プロフィール】

明治学院大学社会学部教授。東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学。専門は社会学、生涯学習論。生涯学習の公共性、コミュニティアニズムの教育論、ボランティア活動と市民社会の関係について研究している